歴史の行間

制度考

三星鑑

肥前陶磁史考

つないでいくこと　～様々な記録を次世代へ～

館報「季刊　皿山」は今回で 100 号となります。有田町歴史民俗資料館の開館は、東館（旧有田町）と西館（旧西有田町）ともに昭和 53 年でした。開館以来すでに 35 年が経過し、この間に収集した資料は現在、西館 835 点、東館は歴史資料 7395 件、民俗資料などおよそ 1000 件（現在データベース化の途中）ですが、年々増加し、さらに陶片などの埋蔵文化財資料（発掘資料）は膨大なものとなっています。これらの資料は静かに多くの事柄を今に伝えてきます。

このほか江戸時代の有田のことを伝える記録と言えば、代々の鍋島家藩主の公譜や藩から有田皿山へ下された命令書のようなものがあります。その他に、享保 3 年（1746）から天保 2 年（1831）にわたり皿山代官所や佐賀藩の請役所などと窯焼きや陶器商人、職人たちとの間で取り交わされた公文書の写しである「皿山代官旧記覚書」（佐賀県立図書館蔵）も有田の歴史の一こまを伝えています。

明治になって社会全体が大きな変化を遂げた折、古い制度を知ることは現在・未来を見据える力になるという趣旨のもとに著された「制度考」（明治 21 年池田家寄贈）は、有田の起源から皿山代官所の年中行事、窯業、商業などの制度を記録しています。著者は明記されていませんが、陶磁研究の第一人者・前山博氏は諸々の史料と照合し、横尾謙氏が著したものと推定されています。

この他にも各家庭に残っていた文書の数々も多くの史実を伝えていますが、椎谷孟保氏が旧大山村村役場に勤務の傍ら、それらを調査研究し、まとめたものに「三星鑑」があります。大正 2 年から史実資料の探索収集に着手し、大正 14 年冬に完成しています。この間、13 年の時を要しました。残念ながら公刊はされず、697 頁に及ぶ全文の文字及び挿絵はすべて椎谷さんの自筆によるものです。「村内に於いては同志応援者を得ず、全て単独の事業」で、各地への出張調査の経費などは全て自費を投じたため生計は逼迫。わずかに大山尋常高等小学校長副島伴六以下 16 名の教師によるカンパ 5 円が唯一の物質的援助だったそうです。

「民歴史を忘るる時に国遂に滅ぶの警句あり」という思いのもと、当時の大山村の地勢要図、村の起源沿革から自然や風俗にいたるまで詳細に調査し執筆されています。中でも松浦党に関する部分が多く、書名の「三星鑑」は松浦党の家紋からきています。原本は椎谷家所蔵。旧西有田町時代に教育委員会へ複写本が寄贈され、当館に移管しています。

もう一つ、仕事を進める中で殆ど毎日のように開く本が「肥前陶磁史考」（昭和 11 年発行　中島浩氣著）です。これも又、白川生まれの中島浩氣氏が昭和 4 年から執筆に取り掛かり、8 年をかけて同 11 年に発行されています。これは「著者自ら山野を跋渉して、古窯址の残缺を探りながら各山の古老を訪ねて、親しく口碑を匡し、或は旧家の器具に貼られし表装紙を剥ぎては古文書を漁る等、其間萬事を放擲して、蒐集に努めた」史料を基に著されたものです。

これらの記録は先人から託された宝であり、有田町、有田町民にとっては知の財産とも言えます。他にはない、有田独自の歴史、史実を次世代へつないでいく機関としての役割が当館に与えられた使命であると実感し、これからも日々努力していきたいと思います。

季刊 皿山 No.100 冬 2013

有田町歴史民俗資料館・館報

陶片が語りかけるもの

十四代　今泉今右衛門
（有田町歴史民俗資料館
有田陶磁美術館協議会会長）

有田に戻り二十数年、古陶器や窯跡の陶片、あるときは窯跡発掘の説明会など、考古学の世界と接する機会は多い。

不思議なことに、江戸期や、明治期の有田の雰囲気が目に見えてくるのである。逆に桃山期以前についての有田は町としての歴史がないため私の頭のなかは真っ白である。以前、奈良の方のこんな話を聞いたことがある。「聖徳太子があの山を越えていったんですよ」と。また岐阜の陶芸家の知人は平安期からの話を見てきたように話される。

一つの小さな陶片から、その時代の様式、好み、技術、商い、そして人々の憧れや欲望までもが見えてくるのである。

私自身、鍋島の仕事にたずさわるなかで、江戸期の鍋島の古陶器や「墨はじき」の技法を通してみてみると、それぞれの仕事において、目に見えない所に神経と手間を惜しまない感覚が鍋島の高い品格を創出する一因に繋がっているのではないかと気が付いた。

古陶器は基本的に変わらないものである。見出されるものはこちらの見方・考え方次第である。考古学の学問は地道な研究であるが、そこから学ぶものははてしなく広がっている。

有田町歴史民俗資料館の館報が 100 号を迎えると聞いた。今後の資料館に何かを期待するのではなく、考古学から学ぶ側が、窯跡の陶片から何を汲み上げることができるか。そのことを今後に期待することが有田の未来ではなかろうかと最近思うものである。

山辺田窯跡出土陶片

有田町歴史民俗資料館・有田陶磁美術館に望むこと

鈴田　由紀夫
（佐賀県立九州陶磁文化館館長）

有田町歴史民俗資料館と九州陶磁文化館は、お互い得意とする分野を補完しながら役割分担を行なってきた。私が歴民を頼りとするのは、古文書が読めずにお手上げの時、尾﨑館長にメールを送って尋ねると、たちどころにコメントが返ってくる。若い頃必要に迫られて古文書の解読の勉強をしたことがあるが、生半可な取り組みではとても身に付かなかった。身近に聞ける人がいるというのは有難いことである。また有田の古窯の出土品について知りたいことがあると、村上氏や野上氏に電話をかけて教えてもらっている。ご両人からすれば歴民が発行している報告書を先ず見て下さいと言いたいところであろうが、やはり聞いたほうが早い。有田に関する記録類も豊富であり、生の情報は九陶の及ばないところである。こうした地元に密着した正確な情報は歴民の核となる財産であり、その引出しを自在に操る優れた職員がいるからこそ資料が活きるのである。

歴民は有田の輝かしい歴史を人々に伝えてこられたが、その伝え方は社会状況に応じて変化している。展覧会や印刷物発行の他に、インターネットを使った情報発信もその一例である。一方昭和 29 年に開館した有田陶磁美術館は、当初は有田磁器の展示館として社会的に大きな役割を果たしてきたが、歴民や九陶が設置され、その役割は大きく変わっている。こうした状況に応じた見直しも大いに議論していただきたい。

歴民は今後も有田の町民に大いに頼りにされ、また町を訪れる人々に有田の魅力を伝え続けられることを期待しています。

出土文化財管理センターで調査中の九州陶磁文化館学芸員

喜右衛門さんの手紙

池田　兆一
（鳥取県米子市在住：池田コレクション寄贈者）

季刊「皿山 (No.92)」で紹介頂いた喜右衛門さんの手紙は、鳥取市にあった家内の実家の土蔵で見つけたものです。母屋は 50 年ほど前に焼失、鬱蒼とした屋敷林に土蔵が一棟だけ残っていましたが、老朽化で崩れ始めたので 25 年前取り壊しました。土蔵には、江戸時代中期から昭和 10 年代までの書籍や書き物、什器、衣類などが残っており、先ずこれらの処分から始めましたが、保存か廃棄かの判断が難しく、終わるまで数年を要しました。

しかし、苦労して選別し住家に持ち帰った代物は、ネズミの尿やカビなどの臭いが家中に漂い堪らないので、喜右衛門さんの手紙や有田焼などの一部を残し、鳥取市立歴史館に引き取ってもらいました。喜右衛門さんの手紙を手元に残したのは、今から 170 年前、因州鳥取と肥前有田の縁を物語る証であり、さらに手紙に添えられた「送り状の事」で、残されていた有田焼との関連を感じていたからです。

今、後を継ぐ人がいない空家や放置された建物が増え、倒壊の危険や防犯上の問題としてクローズアップ、空家対策特別措置法が云々されています。何代か続いた家には、その地方の歴史を語る文書や民俗資料が残されているものです。建物の撤去のみに主眼をおいた対策で終わると、空家の中に残され埋もれたままの史料は、気付かないまま失われてしまいます。空家対策特別措置法が云々されている今、空家に埋もれている史料を掘り起こし守り、顕彰する施策が必要だと思います。

池田コレクションの一部

地域文化創造の核に

森田　一雄
（元有田町歴史民俗資料館館長）

有田町歴史民俗資料館を初めて訪れたのは開館して間がない一九七八年の初冬でした。紅葉に映える建物には品格があり、建築構造学の大家内田祥哉さんが設計にあずかられたと聞き、さてこそとうなずいたことでした。

ただ文化施設により肝心なものは第一にヒトです。その点でも、肥前陶磁史研究の第一人者であった永竹威さんが館長（非常勤）、名著『有田皿山の制度と生活』の著者宮田幸太郎さんを併設された町史編さん室長、青山学院大学で史学を学んだ尾崎葉子さん（現館長）を学芸員とするシフトには厚みが感じられました。

文化が地方自治に登場するのは一九七〇年代の後半、有田町歴史民俗資料館の発足したころからとされます。経済から文化へが命題で、地域に文化を根付かせ得るかどうかで地方自治体の存在意義が決まるとされました。

ここでの文化は人間の感性を豊かにする営みをいい、その必須条件とされたのが行政の文化化と、住民と行政との協働です。行政全体を文化の視点から見直すことから始め、住民と行政との協力によって、地域に独自な文化を築き上げよう、という思想でした。

その自治体の自己革新が九八年あたりから勢いを失います。地方交付税の大幅削減などで費用対効果がいわれ出し、効果が目に見え難い文化関係予算から削られる傾向となったからです。全国に四百数十館ある歴史民俗資料館も例外ではあり得ないようです。

そのような時期に有田町歴史民俗資料館の予算は減っていないと聞いて喜んでおります。有田町歴史民俗資料館は日本陶磁史の証言者であり、語り部です。資料館は季刊「皿山」のほか、「皿山なぜなぜ」、「おんなの有田皿山さんぽ史」、「有田皿山遠景」などの冊子を刊行し、その役割に沿って来られた。しかも、これらが町民参加を伴うものであったことは、有田町政の文化化、町民との協働への刺激策でもありました。季刊「皿山」が紙齢百号を迎えたのを機に、そうした機能と特色を一段と高められることを期待します。

有田駅を陶磁の館に･有田と私

星野　鐘雄
（元 JR 西日本・鉄道、駅ビル建設担当
深川六助令孫）

有田焼に代表される佐賀県の陶磁器は世界に誇る地域文化である。その文化を伝承するためのモニュメントとして、磁器創業 400 年や長崎新幹線着工を契機に佐賀県の駅舎を陶磁器で美装化してはいかが。

夢のような構想だが、ポルトガルでは都市の玄関である駅舎にアズレージョと称される歴史風景偉人を描いた装飾陶板が敷き詰められ、地域特有の文化を感じさせる。日本の駅は車両に比べ、個性がないと云われるが例外もある。博多駅には多数の有田焼染付けの陶板が飾られ九州の玄関口を象徴している。函館駅は函館の歴史を描いた有田焼の大きなレリーフが異彩を放っている。そこでまず有田駅を有田のランドマークとなる「陶磁の館」に改良し資料館のサテライトとしても活用する創案を期待したい。

資料館と私

八尋　聖剛
（ありたれきみん応援団）

退職後、念願の「北部九州と東アジアの歴史」を勉強する時間ができ、妻と共に各地の資料館や神社仏閣・神籠石などを巡り始めました。ところが長年の立ち仕事で運動とは疎遠の生活だったことが災いし、身体のほうがついていきません。そこで脚力を鍛えようと「百五十年前の有田皿山ば　歩こう隊」に参加したことが、歴史民俗資料館との出会いでした。二年間の活動を通じて、町民の方々や子供たちにもっと有田の歴史を知っていただきたいと感じたことが、歩こう隊有志による「ありたれきみん応援団」の設立へとつながりました。資料館でのボランティアを学ぶため、昨年から福岡県立九州歴史資料館で活動しています。一人でも多くの方に資料館にお立ち寄り頂けるよう、応援出来たらと願っています。

資料館・有田と私

田中　晶子
（有田町役場住民環境課東出張所職員）

「季刊　皿山」100 号を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。「皿山」の先駆けとなる「皿山びとの歌」1 号の発行が昭和 62 年 12 月 28 日ということで、私の人生より長い期間、町の人々に愛読されていることに驚きました。私が初めて資料館を訪れたのは小学生のときです。おおよそ 10 年ぐらい前になりますが、「有田の町屋模型作り教室」に弟と参加しました。指導を受けながら丸 1 日かけて出来上がった模型を家族や友達に見せて回ったのを覚えています。その後も高校生の時にボランティア活動の一環として大公孫樹の歴史や有田の大火災について資料館で勉強させていただきました。26 年もの歴史ある季刊「皿山」にこのようなかたちで関わらせていただけることに感謝いたします。

資料館・有田と私

藤　泰治
（伊萬里新聞社主）

日本国中何処にでも人々の営みが有る所には夫々の歴史が有る。これまで地域づくりの全国大会で約15都道府県ほどを訪れたが、私は現地に入ると公立の歴史民俗資料館や博物館等を訪ね、町中の路地を歩き回ってその町の歴史を体感する様にしている。十数年前に長野県小布施町を訪ねた時に特産の栗羊羹の栗の木で歩道を造ってあった『栗の木小径』には驚いた。地域の資源を生かしたオンリーワンの地域おこしだった。我が有田町には縄文時代から中世の松浦党有田氏の居城唐船城址の歴史、有田焼創業400年の歴史等人文科学から伝統産業と幅広く歴史的遺産が残っている。合併後の新生有田町にふさわしい有田郷の歴史を後世に伝えて行く為に、総合的に学べる歴史民俗資料館への衣替えを期待したい。

有田町歴史民俗資料館の軌跡

今回の発行で「季刊　皿山」は 100 号となります。昭和 62 年(1987)12 月発行の第 1 号は「皿山びとの歌」と名付け、その際には「皿山びとの暮しを、古文書や写真を加えてレポートしていきたい」と記しています。当初より、有田町広報に組み込んで町内全戸にお届けするという形をとりました。

その後、平成 9 年（1997）9 月の 35 号からは「季刊　皿山」と改題し、装いを新たにしました。朝日新聞社社友でもある当時の館長による表紙の「町史の行間」は、職員もワクワクしながら読んでいました。

これまでの企画展

当館は昭和 53 年（1978）10 月に開館しました。その時の展示資料は、当時、有田町文化財保護審議会会長の蒲原権氏から町へ寄贈いただいた古伊万里 101 点（蒲原コレクション）でした。開館以前に寄贈を受け、その展示施設という意味合いもあったようです。

その 2 年後、昭和 55 年（1980）に、町内に佐賀県立九州陶磁文化館が開館し、その常設展示資料として蒲原コレクションを移管しましたので、その後は有田町・有田焼の歴史や民俗、文化の調査研究とその成果である資料の常設展示を行ってきました。

企画展としては「江越礼太」展、「正司考祺」展、「谷口藍田」展など先人の偉業を紹介する展示を行い、また、「蔵春亭・有田の進取精神」展、「田代紋左衛門・その製品と貿易」展や、開館 20 周年は「なつかしの有田」展、30 周年には「守り抜かれた伝統」展などを開催してきました。

開館当日のテープカット(左から蒲原権氏、青木類次町長、水辺喜一郎氏)

担ってきた役割

開館当初の館長は永竹威氏（非常勤）で、副館長が館林重夫氏（有田陶磁美術館兼務）。さらに、町史編纂担当として宮田幸太郎氏、学芸員（臨時職員）という体制でスタートしました。同時に有田焼創業 350 年で計画された有田町史編纂事業も本格化し、その事務局が館内に置かれました。

また、昭和 54 年から（財）観光資源保護財団の助成を受けて「有田古窯跡と町並み保存調査会（会長岡崎敬九州大学教授）」が発足し、その事務局も置かれました。今に続く伝統的建造物群保存事業の始まりでした。

「有田古窯跡と町並み保存調査会」のメンバー

よりわかりやすく、楽しく

さらに、当館は町内の方から寄贈された多くの古文書を収蔵していますが、崩し字で書かれた文書はなかなかすぐには読めません。しかしながら、地域の歴史を記した古文書は地域の人が読むことで初めて活かされるということで、昭和 62 年（1987）から古文書教室を開催しています。第 1 回目からの受講生で現在も引き続き受講されている方々もいらっしゃいます。

夏休みには子どもたちを対象とした「町屋の模型作り教室」や「歴史の川ざらい」なども開催しています。この他に、皿山シリーズの「皿山なぜなぜ」、「おんなの　有田皿山さんぽ史」、「有田皿山遠景」の 3 冊や研究紀要、「有田皿山写真館」、各企画展の図録などの編集・出版を行ってきました。特に、「皿山なぜなぜ」は有田町史全十巻を発行後、子どもたちに有田の歴史をわかりやすく、しかもこの本を持って町を歩くことができるものをということで、大きさ・内容を決め、九州陶磁文化館や町内の郷土史家の方々に協力を仰いで出来あがりました。現在、10 刷目で一般の方や町外の方々にも好評です。

また、昨年からは職員手づくりのホームページも開設しました。職員が交代で綴る「泉山日録」もほぼ毎日更新中です。

これらの活動を町の方々に紹介する目的で、この館報も編集・発行してきましたが、これからも多くの皆さまに興味を持っていただけるような内容、文章でお届けしていきたいと思います。

有田内山伝統的建造物群保存地区 かわら版

有田内山伝統的建造物群保存地区は、国から「重要伝統的建造物群保存地区」（以下、重伝建地区）に選定されています。このことは、本紙の通巻 97 号（平成 25 年 3 月発行）でご紹介しましたが、今回は、地区内で実施している修理事業などについてご紹介します。

◆伝統的建造物等の保存修理事業について

有田内山伝建地区は、岩谷川内の下の番所跡（眼鏡橋付近）から泉山の口屋番所跡までの約 2km の間で、15.9ha の範囲となっています。地区内には、文化財建造物・歴史的な資産として指定を受けた 158 棟の伝統的建造物（以下、伝建物）と地区の景観に彩りを添えるトンバイ塀など 130 件の環境物件が混在し、有田内山らしい歴史的な景観が形成されています。

地区内では、指定を受けた伝建物の修理事業が毎年計画的に進められ、将来に向けて保存・活用していくことを目指し取り組んでいます。これら修理事業は、建物の所有者と設計者、施工者、行政担当者が事前に十分な話し合いをしながら、工事の計画を立てます。具体的には、その建物の形式や意匠、工法、材料等を十分に検討して、文化財の建物としての価値を維持・回復するように努め、外観を元の伝統的な姿に戻していきます。また、これらの計画は同時に構造補強や防火性能の向上なども行いますが、文化財の建物でも、現代的で快適な居住空間を確保するため、「建物内部の改装等は比較的自由にできる」ことになっています（県指定文化財等は内部も復原の対象）。

修理事業を実施する場合、費用の一部について助成を行っています。主屋の場合、費用の 10 分の 8 以内で、最高 600 万円が助成されますが、付属屋や環境物件では助成限度額が異なります。また、助成を受ける際は、一定の時期に一定の手順で事務手続きなどが必要となります。助成の内容や手順などについてはお問い合わせください。

なお、今年度実施している保存修理事業は次のとおりとなっています。

（池田孝）

上幸平・森崎邸

修理前の外観は、モルタルのパラペット（通りに面した部分だけ屋根を隠す形で外壁を立ち上げているもの）に覆われていましたが、伝統的な様式に復原を目指すとともに、構造補強を含めた全体的な改修工事を行っています。

大樽・川内邸

雨漏り対策の工事と同時に基礎石などの高さを揃えるため、全体的な家揚げを行ったうえで不陸調整（不揃いな高さを調整すること）を行い、外壁の漆喰工事などを行っています。

大樽・金子邸

1 階の柱など、改築の際に構造材が大幅に抜かれたため、足元が非常に不安定な状況にありました。構造補強を行いながら全体的な改修工事を行っています。

岩谷川内・近藤邸

雨漏り対策の工事を含め、壁面を中心に構造補強を行いながら、外壁面をトタン張りから漆喰の姿に戻しています。

※ 内山地区の電線・電柱の地中化について

有田町や佐賀県では、県道大木・有田線（内山地区の表通り）の電線電柱の地中化に向けた検討を行っています。具体的な事業着手範囲などはこれからですが、有田焼創業 400 年事業を間近に控えた今、地域住民のご理解とご協力を得ながら実施に向けた取り組みを行う予定です。

●お問い合わせ●

規制の内容や地区の範囲、修理事業等に伴う助成内容等については、有田町教育委員会文化財課（43-2899）まで、お問い合わせください。

有田初の窯焼き工房跡が発見された 中樽一丁目遺跡の調査

中樽一丁目遺跡全景

有田町教育委員会では、今年の６月17日から８月30日の間に泉山一丁目遺跡と中樽一丁目遺跡の発掘調査を実施しました。これは、泉山・大谷線という道路の改築に伴うものですが、この中で中樽一丁目遺跡では、“窯焼き”と称される磁器製造の工房跡が発見されました。これは有田では初めて、おそらく製土や成形、焼成に係わる遺構の一括した検出例としては、全国でも初ではないでしょうか。

“窯焼き”とは…？

有田は、江戸時代初期から今日まで続く、磁器の町として知られています。今では特に制限はありませんが、江戸時代には、製土から登り窯による本焼きまでを“窯焼き”と称される業者が、本焼きした素地に色絵を付ける工程を“赤絵屋”が担っていました。

たとえば、江戸中期には、赤絵屋は16軒しかありませんでした。しかし、窯焼きは180軒ほどもあったことが、文献史料により知られています。ところが、どういうわけか赤絵屋は２軒発見されていますが、数では圧倒する窯焼きの方がまったく発見されていなかったのです。

そのため、窯焼きが担う工程については、『染付有田皿山職人尽し絵図大皿』や『日本山海名産図会』をはじめとする絵画や文献史料などから、その姿を推測するしかありませんでした。

工房の変遷

今回の発掘調査地点では、17世紀中頃に工房が成立したと推定されます。床下の焼土が残るだけで方向や規模は不明ながら素焼き窯と推測される遺構をはじめ、窯業関連の痕跡がいくらか発見されています。ところが、17世紀後半の中で一旦工房がなくなったと考えられ、18世紀前半までの間は人々の生活の形跡がうかがえませんでした。

しかし、18世紀後半になると再び窯焼きの工房として復活したようで、以後少なくとも明治までは続いたようです。その間に、各工程に関わる施設は、何度か造り替えられていますが、すべての施設が同時に更新されたわけではありませんでした。ただし、有田の内山一帯が焼失した文政11年（1828）の大火は唯一の例外であり、その焼土を整地した土層の上に新たな工房が築き直されていました。

発見された遺構

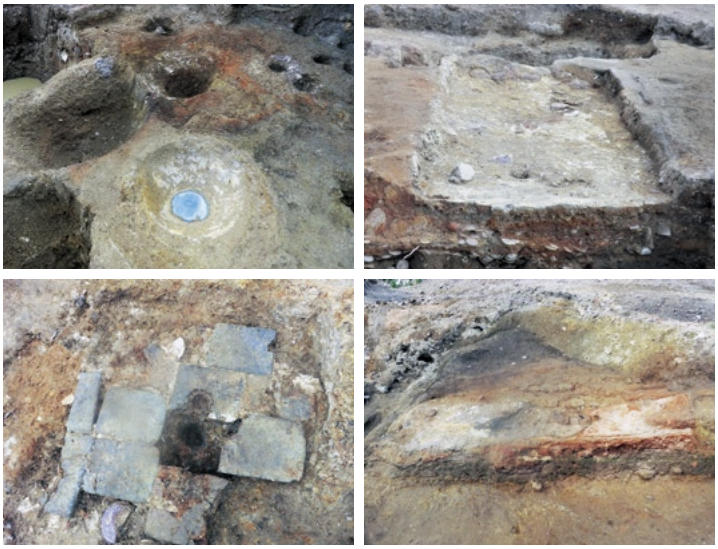
窯焼きの工房内で行われていた作業工程には、大別すれば、製土、成形、素焼き、描画、施釉などがあります。今回は、18世紀後半以降の工房跡では、地面を掘る施設を伴わない描画や施釉の工程を除けば、磁器生産の現場を彷彿させるさまざまな施設跡が発見されています。たとえば、陶石を砕く踏み臼と推測される臼跡や水簸（すいひ）の際にどろどろになった粘土を貯めた“オロ”、ロクロを据えた“クルマツボ”、素焼き窯のほか、用途を特定できない遺構などもありました。また、遺跡内のあちこちに多量の白砂（陶石を粉砕した粉）や焼土、炭が散らばり、土層中には粉々になった素焼き片なども多く含まれていました。

ただし、実際には、各遺構の性格を推察するのは容易ではありません。それは、窯焼き工房跡の発掘の前例もなく、主に絵画や文献史料を参考にするしかないのですが、遺構の場合、施設の地上部分は削平され、地面の下を掘った部分しか残っていないからです。

今後の調査予定

今回発見された工房跡は、大概的には『染付有田皿山職人尽し絵図大皿』に描かれた情景と、遺構の状況が類似していました。そのため、遺構の姿の復元に役立つとともに、逆に、大皿の内容に信憑性があることが確認できたことにもなります。ただし、やはり細かい点では異なった部分も多く、全体的に大皿の方が立派な施設として描かれています。こうした差が、工房差によるものか、あるいは別な要因に基づくものなのかは、類例のない現状では推し量ることができません。

しかし、泉山一丁目遺跡や中樽一丁目遺跡の調査は、来年度も別の地点で実施する予定で、再び工房跡が発見される可能性も皆無ではありません。今後、こうした類例が積み重なれば、かつての工房の様子が、より具体的な姿で復元できるようになるのは間違いありません。（村上伸之）



左上：踏み臼跡　右上：オロ跡
左下：クルマツボ跡　右下：素焼き窯跡

企画展報告

平成 25 年度企画展「アジアが初めて出会った有田焼～蒲生コレクションを中心に」が終了しました。期間中の主だった出来事を紹介します

9 月 30 日　「れきみん応援団」の皆さんに企画展の準備作業の手伝いをしていただきました。写真は企画展のタペストリーを設置しているところです。

10 月 5 ～ 24 日　フィリピン国立博物館の研究員ニダ・クエバスさんが陶磁器研究のため来日されました。ニダさんのご協力によって、今回の企画展でフィリピン出土の有田焼を展示することができました。

10 月 1 日、11 月 23 日に行ったギャラリートークの様子です。参加者の皆さんは、企画展担当者による最新の研究成果を熱心に聞いていました。

10 月 24 日　「蒲生コレクション」の寄贈者である蒲生慎一郎氏(写真右）が来有されました。古陶磁研究会（仮）のメンバーと一緒に展示を見学されました。

11 月 23、24 日　恒例となりました夜間開館と紅葉のライトアップを行いました。

皿山越横街道を歩きました

11月10日（日）、「塚崎・唐津往還を歩く会」による、「永井隊、有田より皿山越横街道を行く」会に参加しました。当館からはれきみん応援団を中心に7名が参加、途中参加も含めて総数35名、中には福岡や唐津など、遠方から参加している人もいました。午前9時に有田駅に集合し、ゴールの武雄温泉駅まで約16㎞の道を歩きました。

今から200年前の文化10年（1813）9月に、伊能忠敬測量隊支隊の永井隊が外尾宿（現在の有田町本町）の武雄道・伊万里道追分から出立して塚崎（現在の武雄市）まで測量しています。今回は測量200年を記念し、現在の道とは異なるところもありますが、出来るだけ残っている旧道を歩きました。

山内町宿田橋にて説明を聞く一行

参加者は雨が降る中、有田町内では伊能測量隊の測量の約50年後に作られた「安政六年有田郷図」（原本は佐賀県立図書館蔵）を複製した陶板を見たり、また国の伝統的建造物群保存地区に選定されている内山地区にある江戸時代の建物を見つけたりしつつ、解説を熱心に聞いていました。

それから山内町（武雄市）に入って旧道を歩き、鳥海天満宮の天井絵などの文化財を見て、最大の難所である西谷峠も何とか越え、午後4時ごろ、武雄温泉駅に到着しました。午後には雨も上がり晴れ間も見えましたが、悪天候での実施に、昔の人の大変さを改めて感じた一日でした。　（永井都）

季　刊　『皿　山』

通巻 100 号（平成 25 年 12 月 1 日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒 844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山 1 丁目 4-1
☎ 0955-43-2678　FAX0955-43-4185
URL：http://rekishi.town.arita.saga.jp